

『海外新聞』に見える幕末のことば —口語文への兆し—

The words of the Bakumatsu as "kaigaishinbun" —Signs of colloquialism—

山口 豊*

YAMAGUCHI, Yutaka*

要旨

本研究の目的は、言文一致がまだ行われていない幕末のことばの様相を『海外新聞』という、幕府をはじめ大名などの権力者から制約を受けることがなかった素材を取り上げ、口語文としての兆しがどのような所に、どのような形で現れるのかということについて用例をあげて調査し、言文乖離の状況下で言文一致へと向かう様子について考察することである。そのために、『海外新聞』の持つ意義や作者たちについて触れ、ついで文語文にまぎれた口語文要素を文法面、表記面から総索引を活用して用例を拾い上げた。その結果、文法面では下二段活用の下一段化が、表記面では発音通りの表記が多く見られることを確認した。さらに外国語表記には一定性がなく、聞こえた通りの音をカタカナ表記しており、当時の人々がどのように聞こえていたのかを知る手掛かりとなることを指摘した。

1 はじめに

『海外新聞』（全26号）は我が国最初の民間による新聞であり、漂流した後、アメリカ国籍となった「ジョセフ彦」が、岸田吟香や本間清雄らとともに横濱で発行した新聞である。

それまでもいわゆる「瓦版」と呼ばれるものが江戸時代からあったが、それらは不定期なものであり、内容も話題となるようなニュース中心であって「新聞」としての体裁はなしていなかった。幕府が発行した『官板バタビヤ新聞』というものもあったが、これは幕府の蕃書調所がインドネシアで入手したオランダ総督府の機関紙を訳しただけのもので、民間に行き渡る新聞ではなかった。他にもいくつか幕府の命を受けて新聞が出されたが、この『海外新聞』が本格的な新聞と言うことになる。

新聞といっても木版刷り数枚を綴じた冊子形式のもので、今の新聞紙とはイメージがかなり違うものであった。（図1）

『海外新聞』が作られたのは元治2年（1865）であり、元号はすぐに慶應、明治へと変わっていくまさに幕末の真ただ中であった。このころ市中の町人たちはかなり現代に近い口語を用いて会話をしていたようである。

江戸時代では滑稽本や人情本などが人気であり、寺子屋の普及ということもあって識字率は高く、貸本屋も繁盛していたという。式亭三馬に代表されるような当時の話し言葉をかなり忠実に記録しようとした作家もいた。

『海外新聞』の発刊された元治2年から遡ること56年前の文化6年（1809）に出板された『浮世風呂』には、すでにさまざまな階層の男女がそれぞれ特色ある口語体で会話している様子が描かれている。風呂屋の二階でへぼ将棋を指している男の会話を引用する。（1）。

先「お手は山々王が三枚飛車角六枚 後「じやうだん
じやアねへ 先「お手には山々といふ内にも香桂前に
たゝず金角寺の和尚 後「銀があるか 先「銀も一分や
二歩はありツ 源「いかい事渡したのう 後「取捨る事

は奇麗だ駒はいらねへ

このように口語体で会話がなされていたのである。

しかし、この時代の公文書、あるいは改まった文はまだ書き言葉であり、契沖が示した歴史的仮名遣いの文語体が正書法であった時代である。

一方、会話は口語体であったため、言文の乖離は大きかったが、時代は確実に口語文へと進みつつあり、書き言葉の文章の中にも口語文の要素が見え隠れしていた。

進藤咲子が『日本語学研究事典』の「新聞」の項目で、「新聞はその性格上、言語および：言語生活を調査研究する上で重要資料であるが、特に幕末、明治初期に出版された新聞はこの時代の日本語史の記述の上で、また国字国語問題研究に果たす役割が大きい。それは当時一般の実用文としての書きことばの実態を反映しているとみられるからである。明治普通文・口語文ができる以前の各種の文体が見られ、新造語を含む多くの看護や現代語と意味用法の異なる語などが見られ、文体、語法、語彙、文字などの研究の宝庫と言うべきであり、言語生活史のうえからも当時の新聞の表記や読者層、音読などの解明が必要であり、資料としての価値が大きい」と述べている（2）ことからその意義がうかがえる。

本稿は『海外新聞』を通してそこにみられる口語文としての要素の用例を挙げ、幕末のことばの実態の一端を見ることを目的としたものである。



（図1） 『海外新聞』第6号 播磨町郷土資料館蔵

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

2 『海外新聞』とその協力者

(1) 『海外新聞』の発行に関係した人物とその時代について

『海外新聞』の発行に関係した人物として、はっきりとわかっているのは、「ジョセフ彦」、「岸田吟香」、「本間清雄」の三人である。

「ジョセフ彦」は天保8年(1837)に播州阿閑村古宮(現在の加古郡播磨町古宮)に住む百姓の子供として生まれ、幼名を彦太郎といった。再婚した母と死別した彦太郎は義父の船で江戸へ向かうこととなる。途中で船を乗り換えて義父より先に江戸に到着し、その帰路に乗った船が難船し太平洋を漂流する。通りがかったアメリカの商船に救助されたが鎖国政策中の日本に戻ることができず、アメリカに行くこととなった。アメリカで世話になった税関長のサンダースの勧めで洗礼を受け、「ジョセフ彦」と名乗った。ピヤース、ブキャナン、リンカーンなど歴代アメリカ大統領とも面会している。アメリカで新聞の重要性を学んだ彼は、横浜で新聞を刊行することを試みた。当初は『新聞誌』として発行したが、途中で『海外新聞』という表紙に変えている。

「ジョセフ彦」は少年期、青年期をアメリカで過ごしたため、英文を読む力には長けていたが、日本文を書く力には欠けていた。そこで協力したのが「岸田吟香」と「本間清雄」であった。

「岸田吟香」は天保4年(1833)に久米郡埴和中埴和谷大瀬毘(現在の岡山県久米郡美咲町柝原)に住む庄屋の子供として生まれ、名を達之治といい、後に銀次郎と名乗った。幼少のころから優秀で、学問の才覚を現し、津山城下で漢学を修め、十八才のとき江戸に出て林図書頭の塾に学び、すぐに図書頭の代講として講義をするようになった。二十四歳のときに藤森恭介の門に入るが、恭介が幕府に追われる身となり、門人である岸田も身を隠さなければならなくなった。妓楼の箱屋や湯屋の三助などとなって働いたが、みんなから「銀公」と呼ばれて慕われた。元治元年に眼病にかかり、横浜のヘボン医師に治療を受けた時、「ジョセフ彦」と知り合う。「ジョセフ彦」が日本文の達者な者を探していたことから『海外新聞』の発刊に加わることとなった。「銀公」と呼ばれていたことから名を「吟香」とした。

「本間清雄」は天保14年(1843)に駿河國小笠郡平田村(現在の静岡県菊川市下平川)に住む医師の子供として生まれた。

横浜でヘボンについて語学を学ぼううちにジョセフ彦と知り合い、『海外新聞』の発刊に加わった。

このようにそれぞれの生い立ちや特技を持つ者がヘボンのもとで巡り合い、新聞の意義について意気投合したのである。

(2) 記事入手年月日と主な記事

『海外新聞』の発行年月日は残念ながら明確な記載はない。ただ冒頭にイギリスの商船から元となる新聞の入手日が記載されているので、それを頼りにおおよその発行日が推定され

る。第1号から第26号までの記事入手年月日と主な記事として取り上げられた国は以下の通りである。なお、底本は早稲田大学図書館資料叢刊2『ジョセフ彦 海外新聞』(3)を用いた。また国名は現在一般に表記されているものを示した。

第1号 元治2年3月13日

フランス、フロイセン、ロシア、オランダ、イタリア、スペイン、ポルトガル、イギリス、アメリカの情勢。

第2号 元治2年3月26日

イギリス、アメリカ、フランス、プロイス、ロシア、オランダ、トルコの情勢。

第3号 元治2年4月12日

アメリカ、オランダ、フランス、デンマーク、スウェーデン、オーストリア、イタリア、スペイン、イギリス、チリの情勢。

第4号 慶應元年4月28日

アメリカ、オランダ、スイス、フランス、フロイス、ロシア、スペイン、イギリスの情勢。

第5号 慶應元年5月11日

イギリス、オランダ、プロイス、アメリカの情勢。

第6号 慶應元年5月26日

アメリカ、オランダ、フランス、デンマーク、ロシアイギリス、中国の情勢。

第7号 慶應元年閏5月10日

アメリカ、フランス、スペイン、オランダ、オーストリア、イギリスの情勢。

第8号 慶應元年閏5月26日

フランス、アメリカ、メキシコ、オランダ、イギリス、ポルトガル、オーストリアの情勢。

第9号 慶應元年6月15日

オランダ、フランス、オーストリア、アメリカ、メキシコ、イギリスの情勢。

第10号 慶應元年7月17日

イギリス、フランス、オランダ、トルコ、アメリカの情勢。

第11号 不明(7月10日の記事がある)

アメリカ、メキシコ、イギリス、フランスの情勢。

第12号 不明(7月26日の記事がある)

イギリス、アメリカ、ロシア、ポンペイの情勢。

第13号 慶應元年10月9日

イギリス、オランダ、ポルトガル、アメリカの情勢。

第14号 慶應元年10月28日

イギリス、アメリカ、南アメリカ、フランス、フロイス、ポルトガル、ロシア、イギリスの情勢。

第15号 慶應元年11月6日

イギリス、フランス、オランダ、アメリカの情勢。イギリスとの貿易相場(茶、生糸、木綿)。

第16号 慶應元年11月21日

イギリス、フランス、ロシア、アメリカ、西インドの情勢。イギリスとの貿易相場(茶、生糸、綿)。

第17号 慶應元年12月12日

イギリス、フランス、オーストリア、スペイン、アメリカの情勢。

イギリスとの貿易相場（茶、生糸、木綿）。

第18号 慶應2年4月17日

イギリス、フランス、プロイス、テネシー、アメリカ、南アメリカの情勢、アメリカ史略、開關のあらまし（聖書の内容紹介）、貿易相場（茶、糸、綿）、引札（広告）。

第19号 慶應2年5月5日

イギリス、ロシア、アメリカ、メキシコ、ドイツ、オーストリア、チリ、フランスの情勢、貿易相場（茶、糸、綿）、アメリカ史略、開關のあらまし、引札。

第20号 慶應2年5月27日

イギリス、フランス、プロイス、オーストリア、ロシア、オランダ、イタリア、アメリカ、南アメリカの情勢、引札。

第21号 慶應2年6月22日

イギリス、フランス、プロイス、ロシア、イタリア、スペイン、アメリカの情勢、引札。

第22号 慶應2年7月5日

ドイツ、オーストリア、オランダ、イタリア、スペイン、アメリカ、ロシア、イギリスの情勢、アメリカ史略、開關のあらまし、引札。

第23号 慶應2年7月20日

イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、スペイン、アメリカ、メキシコの情勢、貿易相場（茶、糸、綿）、アメリカ史略、開關のあらまし、引札。

第24号 慶應2年8月25日

ドイツ、フランス、プロイス、オーストリア、アメリカ、イギリス情勢、アメリカ史略、開關のあらまし、引札。

第25号 慶應2年9月9日

アメリカ、イギリス、プロイス、ドイツ、オーストリア、ロシア、オランダ、イギリスの情勢、アメリカ史略、開關のあらまし。

第26号 慶應2年9月28日

アメリカ、イギリス、フランス、プロイス、オーストリア、ロシア、スペイン、イタリアの情勢、アメリカ史略、開關のあらまし。

このように世界各国の社会情勢を克明に伝えるとともに、アメリカや聖書の紹介、貿易相場、さらには広告まであり、現代の新聞と同じような構成を持っていたことがわかる。

(3) 前後に発行された新聞

前述したように 『海外新聞』は我が国最初の民間による新聞であるが、新聞という名が冠せられたものはこれが初めてではない。幕府が作らせた『官板バタバヤ新聞』があるからである。時代は鎖国から開国へと向かわざるをえない状況であった。そして安政6年（1859）6月、横浜が正式に開港した。このあたりの詳細は丸山健夫がその著書で詳しく述べ

ているので省略する（4）。

開港後は様々な情報が入ってくることとなり、新聞の役割はますます大きなものとなっていく、多くの新聞が刊行されることとなった。

具体的にどのような新聞が刊行されたのか、『幕末明治新聞全集』（5）から、その表題を以下に示す。

文久元年（1861） 『官板バタバヤ新聞』

『官板海外新聞』

文久3年（1863） 『日本貿易新聞』

『日本新聞』

『横濱新聞紙』

元治2年（1865） 『海外新聞』

慶應元年（1865） 『日本新聞』

『萬國新聞紙』

慶應3年（1867） 『中外新聞紙』

慶應4年（1868） 『各國新聞紙』

『中外新聞』

『日々新聞』

『そよふく風』

『日新通志』

『江湖新聞』

『内外新報』

『横濱新報もしほぐさ』

『外國新聞』

こうして見ると、「ジョセフ彦」たちの『海外新聞』がいかに早く時代の先端を切り開こうとしていたかがわかる。

社会は「新聞」の意義に目覚め、明治に入るとさらに多くの新聞が刊行されるようになり、「大新聞」や「小新聞」などの分類がされるほどに多様な展開を見せるのである。

(4) 言文乖離の実態

「新聞」はその性格上、公的なものであり、当然使用される言語は文語体であった。今回対象としている『海外新聞』の文体も文語体である。第一号の冒頭部分を次に示す。（句読点は引用者による）

元治二丑年

三月十三日イギリス飛脚船此港ニ入りしを以て左の新聞ヲ得たり。

フランス事情

二月九日日本正月廿二日ニあたれり。国王より評定所にて政を説きしめすこと有りとなれし出たり。国人皆これを聞て云に、定て太平の政を説示するならんと喜ひ合り。然るに其中にも大商人なぞハ喜はずして云には如何様なことを説示するならん。元来我国ハ金銀の国ニ富饒する工夫を成すことハ少なき故、此度の御触も我等にとりてハ定て宜敷事ニハ非らざらん。然しながら會て一老中の海軍及び陸軍を減ずると云議論を建白ニ及びしと云風説あり。若も其言が全美して右の如き改革が行はるゝ時は自然税も軽くならん。右様な仰渡

しなれい実二我等の心望ニかのふものなり。○フランスにて右の如き改革を行て海陸の額兵の数を減ずるときは能人民の心を得るものナリ。○既ニ国王より命ありて、廿三艘の軍艦ハ人員を減し困船となし、平常ハ用ひず唯非常の為ニ備るのみなり。其他左ニ記する軍艦ハ其役を脱し人を払ひて用ひず。(第1号)

このように文語体で書かれた新聞は当時としては当たり前のことであった。もう一つ当時の文体を示す例として、慶應4年(1868)に岸田吟香が、幕府からの規制を避けるためアメリカ人のウエンリートの名を借りて刊行した『横濱新報もしほぐさ』の一節を示す(6)。

去年正月我友人ペーリイ萬國新聞紙を板行せしが、これも第十篇迄出版してやみぬ。余深くこのことをなげきてもおもへらく、新聞紙ははたはだ有益のものにて、今は世界中文明の國には、このものなき國はあらず、然に日本にていまだこの事さかんに行はざるゆゑは、蓋し新聞紙の世に益ある事をするものすくなきと、これを篇集する人のみづから擧者ぶりて、むづかしき支那文字まじりのわからぬ文を用ゐる事と、且は出版のおそくなりて、時おくれのめづらしからぬ評をかきのせることによる成るべし。余が此度の新聞紙は日本國內の時々のとりさたは勿論、アメリカ。フランス。イギリス。支那の上海香港より来る新報は即日に翻譯して出すべし。且月の内に十度の餘も出版すべし。それゆゑ諸色の相場をはじめ、世間の奇事珍談ふるくさき事をかきのせる事なし。また確實たる説を探もとめて決して浮説をのせず。こひねがはくは諸君のおほく、此新報を買ヒ玉はん事を。

しかし、一方では口語体で会話がなされており、言文乖離は続いていたのである。

当時の口語資料として代表されるものの一つに『牛店雑談安愚楽鍋』がある。『牛店雑談 安愚楽鍋』は明治4年(1871)に仮名垣魯文が書いたものであるが、文芸作品として書かれたものである。したがって『海外新聞』や『横濱新報もしほぐさ』などの新聞とは性格が違うので、単純に比較することはできないが、開国してわずかな期間でしかないのに、すっかり順応している庶民の様子がうかがえる例として以下に引用する。()内の語はルビを表す。

○西洋好の聴取

モシあなたエ、牛(ぎゅう)は至極(しごく)高味(かみ)でごす子。此肉がひらけちやアぼたんや紅葉(もみじ)はくへやせん。こんな清潔なものをなぜいままで喰(く)はなかつたのでごウせう。西洋では千六百二三十年前から専(もつぱ)ら喰ふやうになりやしたが、そのまへは牛や羊はその國の王か、全權と云つて、家老のやうな人でなけりやア平人の口へは這(は)入やせんのだ。追々我國も文明開化と號(い)つてひらけてきやしたから、我々までが喰ふやうになつたのは實(じつ)にありがたいわけでごス。(7)

このように文芸作品などでは口語文体は言文一致に近づいていたのであるが、『海外新聞』は先ほど示したように当然公的な文書として文語体で書かれていることはいうまでもない。しかし、所々に口語体の表記が窺えるのが実態である。

そこで、この『海外新聞』に見られる口語体的な表記について検証することとする。

3 用例検討

我が国の言葉に対する研究は、古くは室町時代にやってきた宣教師たちによって日本語研究がなされていたが、江戸時代には「国学」と呼ばれ、加茂真淵や本居宣長、平田篤胤、契沖、富士谷成章らによって緻密な研究がなされてきた。

明治になると西洋の文法体系の考え方が流入し、さまざまな角度から日本語文法を捉える動きが生まれてきた。ヘボン式ローマ字の考案者であるJ・C・ヘボンもその著書『和英語林集成』(第三版)の序文において日本語の文法体系について述べている(8)。さらにヘボンは『和英語林集成』(第三版)の本文ではいわゆる口語、俗語をも取り上げ、語注に(coll)と示している(9)。

本稿では前述したようにその目的を文語の中の口語的要素を考察するということであるので、学校文法の分類に沿ってその様相を伺うこととする。

文語と口語の大きな違いは動詞の活用の種類に現れる。文語動詞の活用の種類は「四段活用」「上一段活用」「上二段活用」「下一段活用」「下二段活用」「カ行変格活用」「サ行変格活用」「ナ行変格活用」「ラ行変格活用」の九種類であるのに対し、口語動詞の活用の種類は「五段活用」「上一段活用」「下一段活用」「カ行変格活用」「サ行変格活用」の五種類である。さらには文語動詞の「下一段活用」は「蹴る」の一語のみであり、口語動詞の「下一段活用」は文語「下二段活用」から変化したものが多くがそれぞれの特徴となっている。

『海外新聞』においても文語動詞のほとんどの活用の種類が「総索引」によって確認された(10)。以下にその例を示す。

「四段活用」

- ・南部将軍リイも赦し願之文を書て北の将軍より書翰を添て大統領へ出したるとなり(第14号)

「上一段活用」

- ・今フランスの都より来りし書状ニしるすところを見るに風説よりも余程軽き怪我のよし(第1号)

「上二段活用」

- ・昔より試むるに僅に二年の間も待つことなし(第5号)

「下二段活用」

- ・若し今の如き模様にて表向の使節を受るときは我国全く我政府の国と聞ゆれハなり(第2号)

「カ行変格活用」

- ・ハニナと云所へ来て居るイギリスのコンシユル我南北の戦の時南部へ加勢を致せし由訴へ出しものあり(第17号)

「サ行変格活用」

- ・世間の人々是を悪ミて退役為よなど悪口せしことを新聞紙に載せたり (第4号)

「ナ行変格活用」

- ・是によりて牛馬おびたゞしく死し此辺すべて陽気あしく不時候なり (第25号)

「ラ行変格活用」

- ・近き内にナシヤ川をへだつて戦にならんと云模様あり (第22号)

『海外新聞』には文語の特色である「下一段活用」の「蹴る」という語は見られなかった。しかしながら、本来文語にはあるはずのない「下一段活用」をする動詞がいくつか見られるのである。

「をさめる」

- ・並に政府へ納る運上高は二兆一億八千四百七十八万八千三百三十リヤール也 (第4号)

- ・政府へ納る趣を御勘定奉行申出ス (第7号)

「なづける」

- ・民戸を修理して居らしめ自分の居所となしべベローンと号ける (第24号)

このように終止形が「号く」ではなく、「号ける」となっていることからこの動詞の活用は「下一段活用」であることがわかる。前述したように文語における「下一段活用」は「蹴る」の一語であり、その「蹴る」が「下一段活用」から「五段活用」へと変わり、「下二段活用」の語が「下一段活用」となっていくのが口語文法の大きな特徴の一つである。他の箇所には「下二段活用」の「なづくる(連体形)」もみられるので、いわゆる誤記ではなく、口語化しつつあることの現れとみてよいだろうと思われる。

「下二段活用」

- ・タイムスと名くる新聞紙に時務宰相の触に (第19号)

「下二段活用」の「下一段活用」化は口語文では江戸時代前期から始まったとされているが、文語においてはまだ「下二段活用」は守られていた。

- ・表向き新聞に載することを得ざる事なれハ (第4号)

- ・此品八十日已前に比らぶれば大二高値ニなり (第1号)

そのような中での「下一段活用」化が文語である新聞の記事に見られるのである。

本来「下二段活用」の語が「下一段活用」となっているのが確認される例として次のような語が挙げられる。

充てる、言える、入れる、考える、しめる、遂げる、唱へる、はねる、見合せる、向ける、召捕れる

『海外新聞』に用いられた「下二段活用」の動詞は次に示す通りである。()内の「未、用、終、体、已、命、イ、ウ」はそれぞれ「未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形、イ音便形、ウ音便形」の用例があることを表す。

開く(未)、上ぐ(用、体)、与ふ(用、終、体)、当つ(用)、預く(未)、集む(未、用、体)、誂ふ(用)、合す(用)、相添ふ(用)、相見す(用)、改む(用、体、命)、顕る(未、用)、荒果つ(用)、傷む(用)、出づ

(未、用、終、体、已)、出来かぬ(已)、云出づ(用)、云知す(用)、云絶ゆ(用)、云伝ふ(用、終、体)、容る(未、体)、入替ふ(用)、得(未、用、終、体)、浮ぶ(用)、受く(未、用、体)、打掛く(未、用)、うち捨つ(用)、撃留む(用)、訴出づ(用)、生る(用、終)、埋る(用)、売切る(用)、売る(用)、撰除く(用)、教ふ(用)、押寄す(用)、恐る(用、体)、御尋ぬ(用)、衰ふ(用)、追掛く(未)、逐退く(用)、仰付く(未)、高ず(用)、書述ぶ(用)、掛く(用、体)、駆付く(用)、重畳ぬ(用)、飾立つ(用)、枷す(用)、数ふ(体)、固む(用)、買入る(用、体)、買求む(用)、替ふ(用、終)、駆あつむ(用)、枯る(用)、考ふ(用、体)、聞入る(未、用)、聞請く(用)、聞つく(用)、聞ゆ(用、已)、極む(未、用)、企つ(用、体)、加ふ(用)、比ぶ(已)、呉る(用、体)、苦しむ(未)、拵ふ(用、イ)、答ふ(用、イ)、摧る(用)、越ゆ(用)、こわる(用)、避く(未)、下ぐ(用)、ささゆ(体)、差上ぐ(用、終)、さし向く(未)、穿入る(用)、指替ふ(用)、指留む(用)、差向く(用)、定む(用、終)、授く(未、用)、妨ぐ(用)、仕掛く(用)、従ふ(用)、認む(用)、仕立つ(用)、沈む(未、用)、知す(未)、知初む(用)、しるし伝ふ(用)、進む(用)、捨つ(用)、すり変ふ(用)、狭む(用)、攻む(用)、備ふ(用、体)、添ふ(用、終)、揃ふ(用)、違ふ(未)、助く(未、用、体)、立つ(用、終、体)、携ふ(用)、尋ぬ(未、体)、尋ねあつ(用)、たて始む(用)、倒る(用)、絶ゆ(用)、付く(未、用)、作初む(用)、続兼ぬ(体)、勤む(未、体)、積蓋ふ(用)、詰む(用)、強む(体)、出来兼ぬ(体)、遂ぐ(用)、究ぐ(体)、届いづ(用)、とどむ(用)、駐む(用)、捕ふ(未、用)、取揚ぐ(終)、取集む(用)、とりおさふ(用)、取替ふ(未)、取究む(用)、とりたつ(用)、取よす(用)、流る(用)、為呉る(用)、なし始む(用)、なだむ(未、用)、号く(用、体)、舐む(用)、並ぶ(用、体)、慣る(未)、逃ぐ(用)、似す(用)、拔出づ(用)、湿る(用)、願出づ(用)、逃る(未)、乗す(未、用、体)、乗上ぐ(用)、始む(用、体)、はずる(用)、放掛く(用)、離る(用、体)、張りつむ(用)、扣ふ(用)、引上ぐ(用)、引入る(用)、引受く(未)、引かふ(用)、引下ぐ(用)、引立つ(体)、引連る(用)、開く(用)、捨揚ぐ(用)、広む(用)、吹上ぐ(用)、防かぬ(体)、触る(用)、隔つ(未、用、促)、掘得(用)、申合す(用)、申出づ(用終)、申入る(用)、申受く(用)、申立つ(体)、申付く(用、体)、申伝ふ(終)、申述ぶ(用)、申触る(用)、詣づ(用)、負く(用)、待受く(用、体)、待設く(已)、免る(未、用)、見受く(用)、見掛く(用)、見す(未)、乱る(用)、認む(未、用)、見ゆ(未、用、終、体、已)、迎ふ(用)、目掛く(用)、召抱ふ(用)、召連る(未、用)、召捕ふ(用、イ)、萌いづ(用)、持出づ(体)、求む(終、体)、漏る(用)、焼棄つ(用)、焼失す(用)、止む(未、用、終)、譲受く(用)、用立つ(体)、分る(用、終)、分く(用)、忘る(用)、治む(未、用、体)、収む(未)、戢む(用)の以上である。

「下二段活用」と「下一段活用」の違いは「終止形、連体形、已然形」に現れるため、上記の用例においても「終、体、已」の用例があるものは確実に下二段活用であると言い切れるが、それ以外の用例では下一段活用化している可能性は捨てきれない。

また、ウ音便も口語的要素の一つでもある。

- ・初て八年来の願かのふて船三艘と乗組九十人食物三年をさゝゆるだけをたまはりたり (第 22 号)
- ・定てナヤガラも錨を巻上るならんと思ふてはやまり大砲打掛けしものならん (第 4 号)
- ・我がはじめて新国を見出せしこと世の人知らんことを願ふてなり (第 24 号)

助動詞においても口語助動詞の使用が確認される。

- 「れる」
- ・グラネーベレといふ人は寄合頭役今ニ勤め居られるとなり (第 16 号)
 - ・此国政府より仰出されるはピニシヤト云所の手をはなさすには逆も兵端を開かすんは治る事難し (第 20 号)
- 「た」
- ・両替屋のこらすへ願出た金を取りに行もの多し (第 20 号)
- 発音通りの記述態度

次に表記の面からは歴史的仮名遣いではない表記、つまりは公的な文としてはふさわしくない表記で記された語が散見される。多くの語は歴史的仮名遣いに沿って記されている。「ジョセフ彦」の訳文を聞いて、日本文にした岸田吟香は前述のように漢学の講師を務めたほど、素養の十分にある人であった。しかし、そのような人でも正しい歴史的仮名遣いが乱れるのであるから、かなり口語と文語の乖離が進んでいたことが推測される。その例を以下に示す。

「つぐなひ」を「つぐのみ」と書いている。

- ・此償金と云ハ何等のつくのみなるか未詳 (第 4 号)

次に「かいほう」を「かいほう」とした例を示す。

- ・病院を巡検して手厚く介保せしとなり (第 14 号)

「介保」は「かいほう」と読んだと思われる。しかし、正しい表記は「介抱」であるはずである。「抱」の表記は「ほう」である。そこで、発音通りに「ほう」とするため「保」の表記を記載したと考えられる。

次は「かうかい」を「こふかい」と表記した例である。

- ・デー国^{こふかい}の旗をたて航海し来り (第 1 号)

「航海」の語は全 11 例あるが、うち 10 例にはルビがないが、1 例のみ「こふかい」とルビが付されている。発音すれば「かうかい」も「こふかい」も同じであるが、第 1 号の用例にルビを付けてあるところに表記法にとらわれず、実態に即した表記を「ジョセフ彦」や岸田吟香らが求めたようにも思われる。

歴史的仮名遣いからはずれた表記はほかにもあるが、その多くはいわゆる「ハ行転呼音」の表記である。

- 「あらはす」→「あらわす」
- ・古今の勇婦にて常に大功をあらわして名を末の世に残さん事を意とせり (第 25 号)
- 「いつはり」→「いつわり」
- ・毛頭いつわりなしと御承知下さるへし (第 26 号)
- 「いは(ず)」→「いわ(ず)」

- ・然れ共彼是と不承知之事は云ワざりしと (第 3 号)
- 「いはゆる」→「いわゆる」
- ・王侯の地代いわゆる天領を借用せる者より出す (第 7 号)
- 「おはる」→「おわる」
- ・此事おわりて後はじめてやすらいにけり (第 18 号)
- 「かかはり」→「かかわり」

- ・是ハ戦争の有無に^{わり}関係なく唯自国の商人其地ニ在留なし居るものゝ警固ニ行也 (第 1 号)

ここでは「関係」という漢字表記を「かんけい」と読ませるのではなく、係の字に「わり」と右にルビを振って「かかわり」と読ませている。この後の明治期の新聞でも表記にはかなり自由度があるが、一般的には右ルビは「読み」を表し、左ルビは「意味」を示す場合が多い (11) ことからここは「かかわり」と読みを表していると考えられる。

- 「かなは(ず)」→「かなわ(ず)」
- ・取次のものは是を拒み目通りハかなワざる趣を申せしかハ (第 6 号)

- 「かはり」→「かわり」
- ・相場の事 茶 かわりなし (第 22 号)
- 「かはる」→「かわる」

- ・老中すへてかわり其退役の老中各々退役のかなひしことを評定所へ届いでたり (第 23 号)
- 「かはるがはる」→「かわるがわる」

- ・大統領なる者は往昔よりかわるがわる即位して国中の幹たる者なり (第 8 号)
- 「なぎさぎは」→「なぎさぎわ」

- ・水際まで焼け渚ぎワに浮居れり (第 6 号)
- 「にはかに」→「にわかに」
- ・其故ハ此夜にわか^ににブーサと其馬と行方しれずなりにけるとぞ (第 6 号)

- 「まはりゆく」→「まわりゆく」
- ・中ニハ多分アフリカの南をまわり行ハ舟路あらんといふ人多かりき (第 19 号)

- 「もらは(ず)」→「もらわ(ず)」
- ・願へ出したるハ外国を頼み和睦を結びもらわんとなり (第 17 号)

- 「い」「ひ」「ぬ」の表記についても混同が見られる。
- 「いきほひ」→「いきほい」

- ・グリースハ小国と雖もいきほい出るなれハ (第 6 号)
- 「いきほひ」は 9 例あるのに対し「いきほい」は 3 例であるが、単純な表記ミスとは言い難いのではないだろうか。

- 「うばひとる」→「うばぬとる」
- ・夜未タ十時に至らざるにうばぬ取れり (第 1 号)

- 「うばぬとる」は 1 例のみであるが、同じ第 1 号の別の箇所では「うばひ」と表記されており、無意識のうちに混同したことが伺える。
- ・北方にてはボカタレゴ^ーと云へる橋を奪ひ大筒十二門を

得たり (第1号)

「おいて」→「おひて」「おみて」

- ・評定所において時務宰相に附属の若年寄 (第21号)
- ・此国政府におみてオストリヤ国との条約取極り次第に (第26号)

「おいて」は全67例に対し「おみて」は全2例、「おひて」は全33例見られた。「おいて」は「於て」と漢字表記されているが、「おひて」「おみて」は平仮名表記である。この違いが何によるものなのかは今のところ不明であり、今後他の文献からの用例を比較することが必要である。

「用ゐる」はワ行上一段活用であるが、平安時代中期以降「ゐ」と「ひ」の混同が進んだために「用ひる」とも表記されていた。

- ・アームストロング大砲等に用ひて最も宜しからん (第3号)

ただし「用ひる」は上二段活用である。しかしこれにつられるようにして「率ゐる」も同じような変化が起こった。

「ひきゐる」→「ひきひる」

- ・自ら軍卒を率ひて南に趣しに (第2号)

「上一段動詞」の「率ゐる」はワ行上一段活用であるべきものであるが、ハ行上一段活用のような表記で書かれている。本来、ハ行上一段活用は「干る」の一語のみであるから明らかな間違いではあるが、音にひかれて表記してしまったのだろうと推測される。

他にも発音されるまま表記した語がいくつか存在する。

「かやう」→「かよう」

- ・かようの人物大勢あつまり来り (第23号)

「やうす」→「ようす」「よふす」

- ・右のようすにつきイタリヤ国王よりプロイス国王へ (第18号)
- ・多くハ大家の人を選び出し度よふす (第4号)

4 外国語表記の記述態度

現代のようにカタカナ表記の語について一定の統一した基準を持っていなかった当時、耳に入った音をそのまま片仮名で表記するというのも口語文の特色の一つとなっていた。

訳者である「ジョセフ彦」はアメリカで洗礼を受けた際、最初は「Joseph Hico」と書いたが、「Hico」をアメリカの人たちが「ハイコ」と発音するので、「ヒコ」の音に近い「Heco」にしたほどであるからかなり流暢な発音だったのであろうが、筆記者である岸田や本間にとっては聞き取りにくい発音だったのであろう。したがって聞こえたとおりに表記している。文字で読めば同一の場所や人物とは思えないほどであるが、それがかえって口語的な生々しさを出している。

〔国名・地名の例〕

アメリカ南部の州である「カロライナ (Carolina)」は、「キヤーライナ」「キヤライナ」「キヤラキナ」「キラキナ」などと聞こえたようである。

「キヤーライナ」2例

- ・此勢ひに乗して程なくキヤーライナをも取らんこと必定な

りと (第4号)

- ・何れの地なるや分明ならざりども多分はキヤーライナ国内ならん (第4号)

「キヤライナ」3例

- ・或曰北のキヤライナに用事ありて行きし (第6号)

- ・又北のキヤライナ国におみて集会して最早此後ハスレーフといふ事ハ一切致さざるニ決断したり (第15号)

「キヤラキナ」2例

- ・其兵逐々に拔出で、キヤラキナに居るところのジョンストーンの方へ多くにげ行しとぞ (第6号)

「キラキナ」1例

- ・是ハ定而キラキナ国を自分の属国になさんと欲してのことならん (第5号)

フランスの首都である「パリ (Paris)」も、「パレース」「パレス」「ハレス」「バレス」「パリス」「ハリス」とさまざまな表記で書かれている。ただし、この頃はまだ破裂音を表記することが一般的ではなかったため「パレス」と「ハレス」、「パリス」と「ハリス」は同じように発音していた可能性もある。

「パレース」2例

- ・パレースの新聞にハ右様の取沙汰は実に虚説を唱るものなりと記載ありしが (第8号)

- ・パレース都府へ諸国より使節会合して (第21号)

「バレス」1例

- ・バレスの新聞モネートドスワに書しニハ (第14号)

「ハレス」1例

- ・此国城下ハレスといふ所にてコレラ病大に流行して苦しむ由 (第15号)

「バレス」1例

- ・バレスにおみて余多くの商人集会して言く (第17号)

「パリス」4例

- ・パリスより贈りし書面に我国にてハ唯今の多き陸軍を減少す法を定めたり (第2号)

- ・オーストリア国より右委細の事ロンドンとパリスとへいひおくりしかバ (第19号)

「ハリス」4例

- ・千八百六十七年の五月朔日よりハリスにて世界中の珍敷物を諸人に見物成さしめんとて (第2号)

- ・国王ハ十七日に直様出立なしハリスを通りし故フランス国王ら出迎ひなし (第6号)

〔人名の例〕

「ジョセフ彦」は第16代アメリカ合衆国大統領「エイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln)」と握手をした初の日本人でもあった。我々にはなじみのある「リンカーン」という語も聞きなれない岸田たちの耳には次のように聞こえていたようである。

「リンコリン」1例

- ・大統領リンコリンなるものイギリス管轄のカナタと以来条約を収めざることを決断なせり (第1号)

- 「リンコルン」6例
- ・リンコルンは生質廉直にして仁義深かりし人故アメリカ國中リンコルンをしたハさる者なかりし (第7号)
- 「レンコレン」1例
- ・今月四日大統領レンコレンと同じシヨンシン之兩人四ヶ年之間猶位に在ることに決定なして (第4号)
- 「レンコロン」4例
- ・同十四日の夜北部大統領レンコロン」ワシントンの芝居を見物に行しに (第6号)
- 他にもアメリカ大陸を発見したとされる「コロンプス」は「コロンプス」「コロンホス」「コロンボス」などいろいろな表記がなされている。
- アメリカの南北戦争で活躍した「ロバート・エドワード・リー (Robert Edward Lee)」将軍にいたっては、「リー」「リイ」「リキ」「リキイ」「リキー」「レキー」と6種類もの表記で記載されている。
- 「リー」2例
- ・南部将軍リーも亦再召捕んといふ風評あり (第9号)
- 「リイ」4例
- ・リイの事は世間にてまちまちの噂を為し居れり (第5号)
- 「リキ」1例
- ・南の将軍リキと云もの書面を以て自国へ申贈りしに (第2号)
- 「リキイ」2例
- ・其始末ハ先達而南将軍リキイが北将軍グラント降りし段にありと (第7号)
- 「リキー」2例
- ・南部将軍リキーは敵軍との境に多く台場を築きて敵軍の用意を為し居れりと云風説なり (第4号)
- 「レキー」1例
- ・南大将軍レキーと北大将軍クラント一何れも戦の用意調ひし由 (第5号)

5 まとめ

我が国初の民間新聞である『海外新聞』は新聞としての体裁と威厳を文語体という文体で保ちつつも、巷で勢力を増しつつあった口語文体の影響を受けており、特に表記についてその傾向が見られることがわかった。こうした表記態度がこのあと訪れる言文一致の波への兆しとなっていたことは間違いない。

外国語の表記については、現代においても必ずしも統一されたものはない。「外来語の表記」という指針が文部科学省より平成3年(1991)に出されている(12)が、これも一つの目安でしかないのが実情である。

この時代のことばは揺れている。もちろん、ことばの揺れはどの時代においても収まることはなく、絶えず揺れ動いている「生き物」であるが、その揺れには大小もある。幕末から明治へ、鎖国から開国へという動乱の時代においては社会

だけでなく「ことば」も大きな変化を見せる。その兆しがこの『海外新聞』にも見られることを確認した。

表記も揺れていた。この後明治政府が変体仮名を統一し、表記法も統一しようと努力したことは周知の通りである。

今回は『海外新聞』という口語文への過渡期にある資料のことばの揺れの実態について報告した。

今後は『海外新聞』『横濱新報もしほぐさ』という両方の新聞作成に関わった岸田吟香の語彙や表記の変化について考察していきたいと考えている。

(注)

- (1) 神保五彌 校注『浮世風呂』(新日本古典文学大系 86) 岩波書店 1989 p.55
- (2) 飛田良文 他編「新聞」『日本語学研究事典』明治書院 2007 p.1064
- (3) 『ジョセフ彦 海外新聞』早稲田大学図書館資料叢刊 2 早稲田大学出版部 1977
- (4) 丸山健夫『ペリーとヘボンと横浜開港』臨川書店 2009
- (5) 『幕末明治新聞全集』4 世界文庫 1966
- (6) 『幕末明治新聞全集』4 世界文庫 1966 p.251
- (7) 小林智賀平 校注『安愚楽鍋』岩波書店 1967 p.28
- (8) 山口豊 編『和英語林集成第三版訳語総索引』武蔵野書院 1997 pp.2-24
- (9) 山口豊 編『和英語林集成第三版 COLL 語彙一覧』兵庫県立姫路北高等学校 1997
- (10) 山口豊 編『海外新聞総索引』武蔵野書院 2017
- (11) 今野真二『振仮名の歴史』集英社新書 2009 p.100
- (12) 文部科学省「外来語の表記」内閣告示第二号 1991